

キーワード 田園風景、景観の維持継承、農業後継者育成

◎私たちが行ったこと

下：高校生の農業体験を実施している農場

日本一の米作り地域である石狩川流域の田園地帯における地域づくりとは、歴史的な町家を守るだけではなく、人々の暮らしの「場」を考え、文字通り大地を耕すことです。私たちはそのような空知地域の農村で、独自の地域づくりを進めている農場、大学研究者、自治体等を訪ね、地域づくりのネットワークを拡げる活動を行いました。

若い農場主からは学生などの参加による農業体験について、大学研究者からは農業後継者の育成や地域の魅力について、そして自治体からは農地問題に対する行政としての方策についてお話しいただきました。

北海道農村地域環境研究会

ミッション

北海道における農村地域での魅力的な環境づくりをめざして、開拓の歴史、地域空間の分析調査をもとに、地域づくりの計画構想を発信し、都市農村交流や元気のある農村づくりの支援活動を行います。

設立年月 2002年4月

メンバー数 21名

代表者名 柳田良造

北海道札幌市

中央区南21条西14丁目1-3

TEL 011-513-0977

連絡先

柳田良造

y-ryozo@sea.plala.or.jp



右：ZERO プロジェクトメンバー



1 _____農場へのヒアリング

渡辺辰一氏 | 渡辺農場（三笠市・市来知）

ZERO プロジェクト

「農業を中心とした新しい産業の創出」を基本コンセプトに様々な分野（医療、教育、福祉、芸術、スポーツなど）と協力し、連携を深め新しい価値を「創造」していく。農業の新しい働き方を提案し、実践することで、北海道の、ひいては日本の農業が豊かになることを目指している。当プロジェクトの立ち上げイベントには、札幌近郊の若者・学生・地元農業者など 60 名の参加があった。

実施活動：農業体験プログラム、「食」体験プログラム、自然体験プログラム、情報発信

大塚裕樹氏 | 大塚ふぁーむ（新篠津村）

無農薬・無化学肥料の有機栽培にこだわって、色々な種類の農作物をつくっている。子どもの農業体験や大学生の研修生の受け入れを積極的に行い、農業の良さを広く発信している。

畑の学校

6月から10月まで毎月1回小学生を対象に農業を体験してもらうプログラムで、6年前から実施している。

2 _____大学研究者等へのヒアリング

長谷川豊教授 | 酪農学園大学

- 北海道内の農家人口が今後急減する可能性があるなか、道内できちんとした後継者育成事業や農業研修生制度を積極的に行っているのは、道東、浜中町、新得町のレディスファーム、十勝、別海町など少数で、空知地域では町村レベルやJAレベルの取り組みはほとんどない。
- 岩見沢市栗沢町は、独自に民間のスポンサーを捜し、農業後継者育成塾「ほのぼのファーム」をスタートさせた。少しずつであるが成果をあげ始めている。

下：陶芸家 | 大野耕太郎氏

下野勝昭教授 | 拓殖大学北海道短期大学

拓殖大学北海道短期大学の「新規就農コースについて」

- 新規就農コースは開設以来6年目を迎え、深川市などの地元で農業後継者の育成の場としてインパクトを与えてきた。
- 卒業生は4～5名/年。これまで27名の卒業生を送り出している。約半数が農家の経営を担ったり農業生産法人に勤めるなど、新規就農の人材を送り出してきた。
- 大学、深川市、JAでつくる新規就農サポートセンター(NPO)の設立基盤ともなってきた。
- 大学経営の費用対効果の評価から、2009年度以降新規就農コースは廃止になった。新規就農フォーラムを年2、3回、東京、大阪で開催し、入学希望者を募ったが、定員10名に対し、4～5人しか集められなかったことが大きい理由である。非常に無念だ。
- 今後は特別カリキュラムで、大学として農業後継者教育に携わっていきたい。

田川正毅教授 | 東海大学旭川校

- RAP (Rural Art Program) は、ランドスケープ、アート、デザイン、建築を学ぶ学生を対象とし、北空知、江部乙地区の農村を対象地域として、農業体験や空間調査をもとに、その地域に帰属したデザイン演習を行っている。
- 学生を受け入れる農家には、農業体験提供の実績もあり、学生と過ごす時間を楽しんでいるようだ。
- 参加した学生は、他の大学の学生と一緒に課題に取り組んだことが楽しく、それまで知らなかった美しい風景に気付いたことも収穫だったという。

大野耕太郎氏 | 江部乙在住の陶芸家

- ブラジル生まれで東京の大学を卒業後、岐阜県多治見で陶芸を学び、縁があって滝川市の陶芸センターに講師として赴任することになった。



- 滝川市に移住して今年で30年になる。滝川市に移住後、江部乙地区の景観、農村の人々にふれ、江部乙の環境が気に入り、住むことを考える。ここで結婚もし、定住するに至った。
- 環境や暮らしなど、大いに気に入っている。
- この地区は屯田兵村の歴史を有する場所で、林檎が名産であったが、現在はアスパラ栽培が盛んで、アスパラ街道などと呼ばれている。

3 _____自治体へのヒアリング

吉田攻司氏 | 岩見沢市農政部長

岩見沢市の農地の問題としては遊休地対策、後継者の担い手対策、規模拡大が課題である。役所としては北海道空知支庁産業振興農務課長、農業改良普及センター、ホクレンなどとも連携していくことが重要だと考える。

田園環境の維持を目的に、田園空間づくりを検討するワークショップとフォーラムを開催しました。

「田園空間づくりを考えるワークショップ」の開催

2008年9月19日(金)

丸加高原、伝習館

江部乙地区の丸加高原と伝習館を使い、江部乙地区の田園空間づくりを考えるワークショップを開催しました。参加者は5名でした。

午前中は、江部乙地区の丸加高原、旧屯田兵村地区等を車と徒歩でめぐるフィールドワークを実施しました。午後、丸加高原の伝習館の会議室を使い、フィールドワークの成果について話し合いながら、江部乙地区での田園空間環境の魅力、特色、課題を抽出しました。更に今後の田園環境を維持させる基盤となる農家の維持、後継者問題を考えながら、田園住宅などの可能性などについても議論しました。

「農村人材育成による田園空間づくりフォーラム in 空知」の開催

2008年11月22日(土) 13:00～16:30

岩見沢市有明町南1番地20 コミュニティプラザ4階

長谷川豊氏(酪農学園大学教授)、下野勝昭氏(拓殖大学北海道短期大学教授)、渡辺辰一氏(有限会社渡辺農場代表)の3人から、それぞれの現場での農業活性化と人材育成の興味深い取り組みを紹介していただき、地域の農村環境の再生をどのように進めていくべきかを検討しました。

コーディネーターによるまとめ

- ・現在の農村の最大の問題は、地域空間を維持する主体の再生産の仕組み形成にあるといえよう。
- ・後継者難や経営面から離農する農家に対し、新規就農戸数の充足率は低い。
- ・北海道を例にとると農業移住への希望は全国から多いが、実際には希望者の1割ほどしか農業に参加できない。資金面でのハードルの高さの問題があるからである。
- ・農村空間を維持し、農業に従事する主体を形成していく新たな仕組みが求められている。
- ・耕作権の取得による農業の時代が到来しつつある。
後継者のいない農家の土地の耕作権を農協・第三セクターへ集結し、農家請負制度を確立し、農業を志す若者を農業生産法人に労働力として雇い入れ、運営していく仕組み。
土地を食い荒らさないようなルールや地力維持や環境保全の義務を負わせた企業の農業進出の仕組み。
- ・家族経営の農家を柱にしつつも、農村の非農家層や田園住宅、クラインガルテンや週末農業など農業に関心をもつ都市住民等、すべての人々を農業への応援団として活用すべき時代が到来している。
- ・農村の問題は山村漁村においても構造は同様であると思っている。近年徳島県南の小漁村伊座利に興味をもって訪れている。そこでは崩壊の危機に瀕した漁村集落が都市との交流の留学制度を始めたことで、移住した子供達とその家族が旧来の漁村集落に活力を与え、コミュニティを再建する新たな仕組みをつくり出している。

希望者が就農できて、市民農園や週末農業などに関心を持つ都市住民をはじめ、農村地域の非農家世帯など、すべての人を農業の応援団として活用すべき時代がきていると思います。

団体メンバーの声

上：太陽の園農場
下：太陽の園農場で研修中の生徒



私たちが大切にしていること

石狩川流域の空知地域での農村後継者人材育成や環境づくりのワークショップの開催を通して、住民が地域の資源の再発見、環境への誇りの回復、これらを活かした地域づくりに取り組む土台を構築することをめざしています。また、北海道遺産である屯田兵村の開拓計画手法を継承し、今後の地域づくりにつなげていく方法を模索していきたいと考えています。

北海道遺産とは

次の世代へ引き継ぎたい北海道ならではの宝物として、豊かな自然、北海道に生きてきた人々の歴史や文化、生活、産業など、様々な有形無形の価値の中から選定された52件の遺産。全国から応募を募り、専門家や道民等で構成される北海道遺産選定専門委員会によって、平成13年と16年に選定された。

北海道全般を対象とした8件の遺産の中に「屯田兵村と兵屋」が挙げられている。

◎私たちが伝えたかったこと

空知地域の田園空間は、明治開拓期の土族移住村や植民区画の特徴的な計画による開拓で出発し、里山、防風林、屋敷林などの環境要素と一体に豊かな環境を形成しています。しかし近年地域空間を維持する担い手力が低下し、転作による草地や荒地の増加は、農業の耕作にも悪影響を及ぼし、コミュニティの衰退や、田園空間の環境が低下する状況が生じています。

そのような状況で、地域の小中学校でのグリーンスクール（農業体験）の取り組みや農業高校による農産物の即売会、また、新たな農業経営者を育成する取り組みは、田園空間や農村生活への関心を高め、地域での都市と農村交流の流れを生み出しつつあります。農業従事者の高齢化や後継者確保の困難さ等により深刻化する田園空間の維持継承の問題に対し、青少年を核とする都市と農村の交流を活性化させることで、将来の地域空間の担い手となる若者を育成するシステムを確立できればと思います。そして、この田園空間の再生の動きを地域住民、行政、農業団体、学校等と連携し進める第一歩を作り上げていきたいと考えています。

明治期の北海道開拓は歴史上の出来事ではなく、現在も地域の生活・生産・環境基盤となっていることを農村に行くと実感します。
団体メンバーの声

◎エピソード

田園環境づくりの人材ネットワークの豊富化のねらいから、空知地域で若い農場主が意欲的な取り組みを行っている事例のヒアリングに行きました。田園地帯の中の農場に全国から数多くの学生(イベントには60人も参加があったと聞いた)や、地域の小中学生などが生き生きとして参加している興味深い取り組みに触れることができたのは、大きな収穫で、その取り組みの展開は想像以上で、ちょっとした驚きでもありました。今後の活動の進め方に大きな刺激と力強い仲間を得ました。

一方、注目していた拓殖大学北海道短期大学での新規就農コースの取り組みが、大学経営の費用対効果の評価から、2009年度から廃止になることを聞いたのは、逆の意味で驚きでした。この新規就農コースの取り組みを11月の「農村人材育成による田園空間づくりフォーラム in 空知」のメインテーマとして予定していたので、少しフォーラムの中身の修正を行う必要が生じました。

◎私たちの“これから”

地域再生といいながらも、地方ではその「核となる存在」が見出しえなくなっています。その中で、北海道では特色をもった担い手の人材育成と若者を主体とする都市と農村交流の取り組みは、田園空間の再生を考える上での大きな手がかりとなり、地域に影響を与える存在になりうることを改めて確認しました。

その影響は稲作地域、空知地域における田園空間づくりの主要なテーマとなるだけに、次年度以降さらにその流れを大きなものにしてきたいと思います。それが、広く全道的な取り組みへの発展や新たな農村産業の創成につながる可能性を開くのではないかと考えます。

下：空知の田園風景

◎渡辺辰一氏の報告概要

生産→加工→流通→消費の一貫したサービスを実施しなければこれからの農業は生き残れない。

三笠地域に「農業を中心とした新しい産業の創出」のモデルケースを創出し、農業を中心とした観光農場特区を目指している。

一農家では1種類のサービスだが、農家が集まると結果的に消費者に対応した多様な種類のサービスを提供できる。

私たちの立場での社会貢献とは、農業の正しい知識の学びの場の提供と消費者に対して農業の現状について情報発信し続けること。

◎私たち自身で活動を評価

大学教育者、現場の農場関係者による「農村人材育成による田園空間づくりフォーラム in 空知」のようなイベントは、道内でも従来ほとんどなかったもので、その内容は今後の農村地域づくりを進めていく上で、重要な問題提起ができたのではないかと考えます。しかし宣伝不足の面もあり、参加者が10名と少なかったのは少々残念でした。

フォーラムの内容として、若い農場主であるが都市部の大学生との交流で非常に魅力的な農場づくりを進めている渡辺辰一氏の報告は、参加者にとって非常に新鮮なものでした。

結論として様々な問題を抱える農山村漁村地域において、今最も必要なものは、生業を継承・発展させ、コミュニティを支えていく主体となる人材育成であること、人材を育てる農山村漁村地域マネジメント学を運営するには、幅広い分野からの結集が必要であること等を確認できたことではないでしょうか。これらの問題点について、多様な視点から、興味深い問題提起があり、大変有意義なフォーラムでした。今後の農村地域づくりを考えていく上でのひとつの出発点になったと思います。

